九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

平曲譜本の「清ム」注記

中村, 萬里 九州大学大学院(修士課程)

https://doi.org/10.15017/12026

出版情報:語文研究. 56, pp. 29-38, 1983-12-10. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

—)

あるがととでは特に「清ム」注記をとりあげてみたい。の発音注記が多く見られ国語史的視点からいろいろ注目されるので平曲譜本には「スム(清)ツメ(詰)ノム(呑)ワル(割)」等

を示し、濁音形が譜本当時の姿を反映する>(『平曲譜本の研究』記が必要だった。(中略)一おうその清音形が中世頃からの伝統形本当時の中央語では一般に濁音形が優勢だったからとそ「清ム」注この「清ム」注記の或ものについて奥村三雄氏は<少なくとも譜

が奥村氏のお考えである。 が奥村氏のお考えである。 が奥村氏のお考えである。 が奥村氏のお考えである。例えば「勝事(尾崎本181d)」の語末等に のりとした≫ために付した。つまり、平曲伝承の初期においてそれが清音だった≫のに対して、(b)≪それは譜本当時の中央語で濁音形を普通だった≫のに対して、(b)≪それは譜本当時の中央語で濁音形を普通がった。例えば「勝事(尾崎本181d)」の語末等にいりと述べられる。例えば「勝事(尾崎本181d)」の語末等にいり、と述べられる。例えば「勝事(尾崎本181d)」の語末等にいり、と述べられる。例えば「勝事(尾崎本181d)」の語末等にいり、

注記の必要性と言えば、中世末期の抄物資料にも

中村萬里

○鄭玄モ本テハテイケントヨムソソラニ云時ハ鄭玄トヨムソティケン スム スム

トヨムソ 〔同・⊖級頁〕○礼記ノ檀弓篇ニアリソラニ檀弓ト云ソ礼記ノ本テハタンキウダング 〔玉塵抄⊖8頁〕

世界にはいくつかの読み方があって、それについての注意を促したまれてしまうおそれがあった≫という事を示す。つまり、こういうしないと、ソラニハ「ヂャウゲン」「ダングウ」のように濁音でよのような清濁に対する注意があるがこれらの場合も、やはり≪注意のような清濁に対する注意があるがこれらの場合も、やはり≪注意

詩学大成抄に ものと考えられる。

書ノ名ニ春秋ト名ルコ多ソ 〔下郷頁〕
冬トハソノウチニコモリテアルホトニニッ字ッキッテカルウスナリー年ト云心ソー年中ノアルコラシルス心デ春秋ト云ソスナリー年ト云心ソー年中ノアルコラシルス心デ春秋ト云ソテトハソノウチニコモリテアルホトニニッ字ッキッテカルウスナリー年ノ春夏秋冬ノ四時ナリ春ト秋トヲ云へハ夏ト

とある。との記述は平曲がその発生当初の形を保持しながら伝承さ

が注意してかきとめたものとみるべきであろう。れていく姿を詩学大成抄を記した惟高抄安(一四八〇~一五六七年)

はこのことを証明するものである。
されることになる。例えば、尾崎本「春ҳ秋(22a)」の注記例など分るがこのままの伝承の形がやがて譜本化されて「清ム」注記が付行春秋」の読みは、惟高の時すでに違和感を抱かせていたことがが注意してかきとめたものとみるべきであろう。

うような考え方にも限界がありそうである。するというのは、譜本当時の一般的な語形が濁音だった証拠≫といするというのは、譜本当時の一般的な語形が濁音だった証拠≫といた。「平曲譜本の研究」引頁でも述べられた如く≪清ム注記が存

する事は難しいと思われる。(例えば、濁点についてそのすべてを≪その語に濁点が付されるの例えば、濁点についてそのすべてを≪その語に濁点が付されるの

を伴う。

られる。とすれば「清ム」注記に関しても或程度その様な検討が必対し有意的・無意的に適宜濁点を付する≫という事もあったと考えるが、≪当時の一般語形が清音だったから、特に濁点を付して注意るが、≪当時の一般語形が清音だったから、特に濁点を付して注意

要かと思われる。

又、「清ム」注記が付されたと考えられるのである。 とため「清ム」注記が付されたと考えられるのである。 「人代(京大本21オ)」の注記例など、音声変化としての清濁の変化というよりも、漢音読み・呉音読みという漢字の読み方に関係する場合もありそうである。「人代」の例は伝承当時は呉音に関係する場合もありそうである。「人代」の例は伝承当時は呉音に関係する場合もありそうである。「人代」の例は伝承当時は呉音に関係する場合もありそうである。「人代」の例は伝承当時の間における語形又、「清ム」注記が平曲伝承の初期~譜本当時の間における語形とため「清ム」注記が平曲伝承の初期~譜本当時の間における語形とため「清ム」注記が平曲伝承の初期~譜本当時の間における語形と、「清ム」注記が付されたと考えられるのである。

更には、奥村氏自身も説かれた如く、「平曲伝承のはじめ」とか できれば「譜本成立期」という概念にもいろいろ問題が残る。今その後者 について言えば、A譜本の「清ム」注記がそれ以前からの言い伝えによ とすれば「譜本成立期」というのは当然B譜本の成立期という事に とすれば「譜本成立期」というのは当然B譜本の成立期という事に とすれば「響本成立期」とかいう概念にもいろいろ問題が残る。今その後者

が、何れにしてもとの種の発音注記の解釈はいろいろと難しい問題以上、「清ム」注記の 解釈に 関する 問題点の いくつかを述べた

考察を試みようとする。 取り敢えずそのような問題をふまえつつ、字音語の清濁に関する一取り敢えずそのような問題をふまえつつ、字音語の清濁に関する一挙に解釈するような事はできないわけだが

尚、尾崎本の場合は次の如く、伝授物以下(大学堂書店影印本で・九大本)を参考資料として用いる。・九大本)を参考資料として用いる。

・ 九州大学蔵本平曲正節〔略称・京大本〕、九州大学蔵本平語〔略称京都大学蔵本平曲正節〔略称・京大本〕、九州大学蔵本平語〔略称京都大学蔵本平家正節〔略称・尾崎本〕を中心に置き、

1136頁以降)に極端な発音注記の偏在が認められるが今回は同質のも

はり

<清 ۷> (1)のとして取扱う。 踏本 京 範囲 九 尾 爆及朱 墨 朱 160 (1) 9 250 92 156 (II)53 4 21 161 <詰 メ> 京 潜本 九 尾 鯅囲 墨及朱 墨 朱 264 1 235 (I 110 54 0 (II)79 49 132

<呑 ム>								
4,		京		Б	潜本			
九	墨及朱	墨	朱	尾	範囲			
216	3	186	83	31	(1)			
	0	41	22	87	(II)			

(A) 語頭

しては尾崎本を用いる)。

から順に列挙すると次のようになる(数は異なり字数、調査資料と されている一字またはそれ以上からなる漢語例を頻度のたかいもの 漢字に限って多く注記が付されていることである。そとで注記が付

平曲譜本の「清ム」注記を一瞥して先ず注目されることは、ある

				. !
字	例数	字	例数	1
進	2	大	13	
同	2	神	10	
田	2	上	6	
地	2	覚	6	
顕	2	土	3	
供	2	承	3	
修	2	群	2	
,		عد.		

2 || 前 2 太丨

<割

京

7 12 0

京

211

137

(B)語中尾

字

山 8

上 4

次 2

子

照 2

2

例数

3

暴及朱 墨 朱

0 3 22 0

九

20 0 ル>

<清

尾

113

116

尾

譜 本 / / 範囲

(I)

دے) مے

譜本

(I)

(II)

漢語 (II)

注(2)▽数は異なり語数 注①▽数は延べ語数、尾・京・九はそれぞれ尾崎本・京大本・九大本の略。 ▽||は平物(巻一上~十五下)|||は伝授物・灌頂巻等。例、「清ム」注記で(5・8オ「内府」) ▽京の朱及墨のもので問題を有すると思われるものは除いた。 ▽京には朱・墨の注記があるが区別せずに示した。 例数 字 塔 2 時 2

> 事 2 覚 3

代

臺 2 太 3

堂 2 者 3

土 2 州 3

道 2 官 2

牒 2 中 2

地 2 北 2

河 2

> 2 法 2

範疇に従って整理すると次のとおりである。 次にMMに列挙したところの諸字をあらためて『韻鏡』の清濁の

(=)

る位置によって前表(A)(B)の如く語頭・語中尾に分け『韻鏡』の清濁 清音字に多く「清ム」注記が付されていることがわかる。 一語、異なり語数二二九語にのばる漢語について、その注記の存す そこで更に、尾崎本で「清ム」注記が付されている延べ語数三二 この表により、

語頭では「韻鏡」

濁音字に、

語中尾では「韻鏡」

の範疇で分類したものを次に示す。

					_	
)	字	声母	清濁	字	声母	清濁
	塔	透	次清	山	審	清
	時	禅	濁	上	禅	濁
	事	牀	濁	覚	見	清
	代	定	濁	次	清	次清
	憂	定	濁	太	透	次清
	堂	定	濁	者	照	清
	土	定	濁	州	照	清
	道	定	濁	官	見	清
	牒	定	濁	中	知	清
i	地	定	濁	北	幫	清
	河	匣	濁	子	精	清
	人	Ħ	清濁	法	非	清
				照	照	清
				照	照	清

声母清濁 字 字 声母清濁 道 大 定 定 濁 濁 同 定 濁 神 牀 濁 田 定 濁 上 褝 濁 地 覚 定 濁 見 清 顕 暁 土 濁 凊 定 供 見 承 褝 清 濁 修 心 清 群 群 濁

▽京大本の数は朱・墨を一緒にした ▽数は延べ語数。④『韻鏡』の清濁 回「清ム」注記の位置。 数。九大本の数は巻一上~十五下

(実の) 尾崎木)

太 透 次清 前 従 濁

(B) 語中尾

	. '	M.	PE	叫件)		
計	〈次清〉	へ清ン	〈清濁〉	へ濁ン	① / / @	漢
147	4	37	0	106	語頭	150
174	18	81	3	72	語 中 尾	語
321	22	118	3	178		
284						和每

〔九大本〕

				-		_
計	〈次凊〉	へ清ン	〈清濁〉	へ濁ン	Ø Ø	漢
131	7	21	2	101	語頭	仸
119	6	58	7	48	語中尾	語
250	13	79	9	49		
218						和語

〔京大本〕

231. 7 . 71.2						,
計	〈次清〉	〈清 〉	〈清濁〉	〈濁 〉	① / @	漢
151	5	27	5	114	語頭	决
192	18	91	9	74	語中尾	語
343	23	118	14	188		
143						和語

2	尾山	商本]		
青人	〈清濁〉	へ濁~	Ø/ Ø	\#-
8	0	68	語頭	漢
2	2	49	語中尾	語

(表

人次清 計

					/ 6	344-
99	3	28	0	68	語頭	漢
130	17	62	2	49	語中尾	語
229	20	90	2	117		
		(九	大;	本〕		NEW PARTY

▽数は異なり語数

		(九	大力	本〕		多考
計	次清〉	へ清 ~	〈清濁〉	へ濁く	Ø/ /@	7#
67	5	11	1	50	語頭	漢
99	5	46	6	42	語中尾	語
166	10	57	9	92		

1

とは前表(日的からも窺知されたことであるが)。 と、比率にして 117/229≒0.51 とと、比率にして 63/229≒0.28 、など一見して知られる(とのと 表①②により「清ム」注記は⑴『韻鏡』濁音字に集中していると ii『韻鏡』清音字の語中尾に多い

【Ⅰ】『韻鏡』清音字・次清音字の場合

する(傍線部に「清ム」注記がある)。

注記の実例を示す意味からも以下注記例を煩瑣を厭わず示すことに

とれらの点を中心に、個別的な検討を進めて行く。

尚

「清ム」

通則とは別になんらかの事情があると想定される。紙幅に余裕がな 起すること自体、不自然である。それ故これらの例については右の つも濁らず読まれていた文字に、ことさら「清ム」注記を加えて喚 もに清音になるとされている。漢音・呉音の違いにかかわりなくい · 韻鏡』清音字・次清音字は、模式的には漢音・呉音を問わずと

> 例に分ける ことにする。 以下『韻鏡』濁音字の 場合も 同様に分け られるので〔Ⅰ—1〕語頭への注記例、〔Ⅰ—2〕語中尾への注記 どめておく。その際、語頭を語中尾とでその注記意図に差異が認め い故、その内で特徴的な例だけを検討の対象としてとりあげるにと

語頭への注記例

d) 故亡父(119d) 劫(30a) 勲功(115a) 化導(72d) 顯(b) 覚明(114a) 覚王(114d) 供奉(82c) 供仏(82c) 恭敬(191 (128c) 性照(14a) 修(88c) 修法(89a) 新羅(110a) 先生b) 顕密(82a) 駿馬(16d) 卒(121d) 照陽殿(132b) 讚南院 江相公(88 b)覚快(81 a)覚尋(74 d)覚宗(188 d)覚道 (40a)率(118c)殿中(27c)般若寺(120d)太子(18a)太

【I―2】語中尾への注記例 上皇 (1181 a) 塔廟 (1231 c)

1089 b) 横死 (11 b) 信西 (22 d) 螢雪 (85 c) 高声 (43 d) 赤山 c) 貞観(154a) 冥顕(151b) 澄憲(124b) 太宰(28d) 弓箭(高雄山(152c)金峯山(93d)光明山(45c)陰陽師(74a)善 者(878 b)王者(267 c)案内者(222 b)消息(51 d)故三位殿(225d) 遍照寺 (30b) 教主 (185b) 冥衆 (753c) 両職 (271a) 盛 諸州(138c)荆州(47c)揚州(47c)愛執(175c)仏照禅師(333c)逆即是順(520d)猶子(75a)長子(660d)昌俊(79b) 永覚(123c)行宮(1273b)皇后宮(614b)三官(1198a)電戟(1191 上綱(80a)舞閣(41c)守覚(80b)源覚(183b)房覚(89d) (29a) 霊山 (25d) 叡山 (75a) 比叡山 (26c) 育王山(25b)

(31c)七党(95b)成等(30c)上東門院(88a)五智院

(14c)和気(151b)上卿(66b)不次(187a)路次(99b)歳敗北(117a) 西光法 師(85b) 受法(222d)虎口(151b)蜂起28c)日本国中(151c)天中(83a)能転(151c)西北(75a)

c) 堂塔(180a) 三塔(25a) 漢天(68a) 五町(25d) 同胞次(111b) 春秋(22a) 江太夫(97b) 小弥太(50d) 平太(104

(191d)玄鑒(119c)両宗(89b)嘱請(75a)李将軍(21d)

そうである。 記意図が或程度理解できそうなものとそうでないものとに二分され記意図が或程度理解できそうなものとそうでないものとに二分され〔I―1〕の場合、「清ム」注記が付されている諸字は次の如く、注(神器(110b)

①···覚•殿•先•般•太•江•供

み「ガク」が支配的であった。それ故、類推をおとして「ガク」とた。「学」は『韻鏡』獨音字匣母の字であるが譜本作成当時呉音読字と字形も類似し声符を共有しており同韻であるので通用されてい「()(明年))で、(覚

読まれないために注記したと思われる。

「供」字は「江帥・供御」等のような語の存在を契機として濁って防止、また「大夫・大士・大臣」等との識別作用のため、〔江〕・字はその当時頻用されていた〔大(韻鏡濁音字定母)〕字との類推で「ゼン」と呉音形に濁って読まれることを防ぐため、〔太〕字との類推で「ゼン」と呉音形に濁って読まれることを防ぐため、〔太〕字は、「宮殿」とか「殿堂」とかいう殿舎の意の 呉音読み〔殿〕字は「宮殿」とか「殿堂」とかいう殿舎の意の 呉音読み〔殿〕字は「宮殿」とか「殿堂」とかいう殿舎の意の 呉音読み

ろうか。 読まれてしまうおそれがあったため、敢えて注記したのではないだ

「L―2」の易合、その上妾子が幕涓尾を与しているかでかて よっく看取されることは注意を要する。とができない。但し、注記されたものが尾崎本の伝授物以下に多さらに「清ム」注記を付しているがその注記意図を十分に理解する()について、〔恭・故〕など右に「ク・コ」とフリカナを振り、()について、〔恭・故〕など右に「ク・コ」とフリカナを振り、

てその注記意図に若干の違いが生じてくると思われる。 【1-2】の場合、その上接字が鼻韻尾を有しているか 否かに よっ

資料を用いながらこれを補っている。 三雄氏・小林芳規氏・沼本克明氏等いろんな諸氏がそれぞれ違った連濁するという法則は随分古くから指摘されている。最近でも奥村一般に、上接字が鼻韻尾を有する場合、下接字音語は原則として

(a) 上接字(鼻韻尾) + 下(濁)…(社檀・罪業 その他)
(b) 上接字(鼻韻尾) + 下(濁)…(両方・興福寺・唱歌その他)
(c) 上(宮) + 下(濁)…(両方・興福寺・唱歌その他)

で聴き覚えてきた語りの音とに相違があるためどうしても「清ム」成立当時一般に連濁していたと思われる。それ故、注記者自身が耳の(源覚・漢天・天中・電戟・三官・長子・盛者・貞観…)は譜本る。とすると注記例のうち過半数以上の上接字に鼻韻尾を有するも上接字に鼻韻尾を有する場合にいわゆる連濁化現象が多く起ってい上接字に鼻韻尾を有する場合にいわゆる連濁化現象が多く起ってい上接字に鼻韻尾を有する場合にいわゆる連濁化現象が多く起ってい上接字に鼻韻尾を有する場合にいて楽曲譜本を調査したところ、やはり

を付しているといったように音韻論的には同じ環境にあっても「清 し、例えば、「者」について「盛者・案内者・王者」では「者」に清 ム」注記は 連濁形を 否定しようと するものと いえそうである。併 注記が必要だった。一応『韻鏡』清音字・次清音字の語中尾での「清 ム」注記のある場合とない場合とがある。 ム注記がほどこされているが、「長者・亡者」等では「者」に濁点

はなさそうである。 ・七党…)についてはやはり譜本成立当時、一般にその濁音読みが 一般的であったために注記したと思われ、それ以外の積極的な理由 一方、上接字に鼻韻尾を有しないもの(舞閣・太宰・高声・和気

は注記者自らの意図によるものか現時点では判定し難い。 者については、伝統的にうけついできた平曲特有の語りか、 記を付さざるを得なかったというような注記意図が想定される。後 た伝承音当時の語り音を反映させるためにはどうしても「清ム」注 てともすると濁って読まれてしまいそうなので耳で聴きおぼえてき いものとが存する。前者は、譜本作成当時、類推や連濁などによっ けであるが、「清ム」注記の効果がよく生きているものとそうでな 以上、「韻鏡」清音字・次清音字への注記意図を簡単にみてきたわ

必要があるのかもしれない。 ては濁音によるものがあったという岡本氏の御指摘も考えに入れる 特に語頭の場合、『韻鏡』清音学・次清音字であ日本漢字音とし

【Ⅱ】【韻鏡】清濁音字の場合

日母は日本の漢音で濁、呉音でナ行となるのが通則である。との場 a)」の二例のみで、ともに日母の「人」字である。ここで漢語の 『韻鏡』清濁音字への「清ム」注記例は「家人(331d)夫人(1327

(21d)通乗(Md)堂上(28c)地(27d)地久(18la)田

らの呉音ニンの読みを遵守するには「清ム」注記が必要だったと考 れる如き漢音ジンの読み方がかなり盛んだったために伝承音当時か たいための注記と思われる。つまり譜本当時「唐人・凡人・行人・ 合「人」字への「凊ム」注記は漢音ジンではなく呉音ニンに読ませ 無人・文人・冷人・美人…(それぞれ「人」に濁点あり)」に見ら

えられる。

ある。 る。「清ム」注記は、勿論清濁の問題に関する注記であるが、そと には音声としての清濁変化とは関係のない注記も存していたわけで 音読み・呉音読みというような漢字の読み方を示すためのものであ との「家人・夫人」への注記などは清濁の変化とは関係なく、漢

〔Ⅲ〕『韻鏡』濁音字の場合

〔Ⅲ─1〕語頭への注記例

号(328)降人(994)宮(694)玄応(1920)群(1166

前駆(116c)全真(276b)存(116b)実定(271d)述懐(186b)弟(187b)罪業(54c)在地(983d)残害(191c)前司(11c) 神(161d)神器(212b)神火(140c)神輿(25d)神威(182b) 大宗国(25c)大理(11c)待賢門(61b)道路(111a)道風 c) 大石(514d) 大切(150a) 大略(600c) 大相国(476d) 大守(186)大掖(116)大功(150a)大将(166)大臣(888 上宰(187d)上東門院(88a)上洛(180c)承久(64a)承悦 神国(161d)神幣(168b)神明(179a) 神 竜(95b) 神泉苑 (182d)承和(199c)禅師(73a)大化(125c)大虚(153a) (181a) 時俗 (183c) 上古 (351a) 上皇 (141d) 上卿 (66b)

【Ⅲ-2】語中尾への注記例

平質(122a)長河(178a)共河(957a)英豪(186d)神功皇后(117a)皇后(186)大極殿(183a) 安全(180) 北族(555d) 度(144 c)堂(115 c)庆城(180 c)主上(50 b)度上(60 b)大臣(828 c) 方面氏(116 b)岩石(116 d)尊大(113 b)後代(14 b)聚代(116 b)) 大臣(828 c) 方面氏(116 b) 方面氏(116 d) 方式(116 d) 下式(116 d

なされたとしたらもっと多くの「韻鏡」濁音字への注記が見出されなされたとしたらもっと多くの「韻鏡」濁音字は、一般に日本の漢音清・風音学に集中している。『韻鏡』濁音字は、一般に日本の漢音清・大れると『韻鏡』濁音字の場合、譜本作成期に於いては呉音読みの入れると『韻鏡』濁音字の場合、譜本作成期に於いては呉音読みの入れると『韻鏡』濁音字は、一般に日本の漢音清・も思える(連濁形に関する注記だった可能性もないわけではない方が優勢で、呉音との混読をさけるために「清ム」注記を付したとも思える(連濁形に関する 注記でついた漢字は、そ表①②から看取されたように、「清ム」注記のついた漢字は、そ表①②から看取されたように、「清ム」注記のついた漢字は、そ表①②から看取されたように、「清ム」注記のついた漢字は、そ

なものをとりあげて若干の考察を行なう。たと思われる。以下、〔Ⅲ-1〕・〔Ⅲ-2〕の注記例の内、 特徴的立った上で、注記者自らがもつ尺度に照合させることによってなし機械的・盲目的に注記したのではなく、あくまでも語りの伝統性にるはずである。即ち、注記者はその当時の音との相違から判断して

先ず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例は異なり字数二二九例 先ず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例は異なり字数二二九例 先ず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例は異なり字数二二九例 先ず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例は異なり字数二二九例 たず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例は異なり字数二二九例 たず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例には異なり字数二二九例 たず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例には異なり字数二二九例 たず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例には異なり字数二二九例 たず、〔Ⅲ-1〕語頭の場合、その注記例には異なり字数二二九例

辞書)において、漢音シンに読むか呉音ジンに読むかはその音韻論・神宝・神質(Kinriô)… 波線部に濁点・フリカナ(括弧内は日葡(Kintocu)神妙(Kinden)神人(Kinnin)神拝(Kinbai・Inpai)(Kinme)神殿(Kinriô)… 波線部に濁点・フリカナ(括弧内は日葡複合 語、 切 神器(Kingui)神璽(Kinnin)神輿(Kinyo)神徳複合 語、 切 神器(Kingui)神璽(Kinxi)神輿(Kinyo)神徳複合 語、 切 神器(Kingui)神璽(Kinxi)神輿(Kinyo)神徳

は出自が仏典か漢籍か、又使用される場面・文脈上の関係はどうかどの様な状態だったかという事が重要課題となるが、それについてた語彙による偏りが認められる。こうして見るとどの時期においてた語彙による偏りが認められる。こうして見るとどの時期においていかなる音に既に完全な語彙音としての固定化が完了していたかといったとが問題になってくる。このととについては、伝承当時からいったとが問題になってくる。このととについては、伝承当時からいったらどちらの読みも可能であるが譜本ではだいたい的環境からいったらどちらの読みも可能であるが譜本ではだいたい的環境からいったらどちらの読みも可能であるが譜本ではだいたい的環境からいったらどちらの読みも可能であるが譜本ではだいたい

次に、〔Ⅲ—2〕語中尾の場合も〔Ⅲ—1〕と同様に譜本当時呉次に、〔Ⅲ—2〕語中尾の場合も〔Ⅲ—1〕で言及したことと重なるが「海上・主上・庭上・太上皇に性をふくんだ文字についても注記をほどこしている。〔Ⅱ—2〕・険性をふくんだ文字についても注記をほどこしている。〔Ⅱ—2〕・険性をふくんだ文字についても注記をほどこしている。〔Ⅱ—2〕・険性をふくんだ文字についても注記をほどこしている。〔Ⅱ—2〕・両氏」などの注記例にみられるように連濁して濁音に読まれる危いに、〔Ⅲ—2〕語中尾の場合も〔Ⅲ—1〕と同様に譜本当時呉りが認められる。

等いろんな面に関する検討が必要になる。

濁点の解釈に ついても いろいろ 難しい 問題があるのかもしれな

(三)

以上、筆者なりに尾崎本の「清ム」注記には如何なる傾向性があり、その注記は何を意図したものであるかを分析的に考えてきた。り、その注記意図が判然としないもの、語彙による偏りがあるものなどが存したが、二節で示した如く「大・神・上」など同一の文字に対して注記を加えたものが『韻鏡』濁音字に、はなはだしくめだっている。このことは譜本当時その呉音読みが一般に定着していたことを物語っている。また『韻鏡』清音字・次清音字の語中尾に多く存する注記例からその当時連濁して普通濁音形に読まれていたことが推測される。

清濁状況の一端が見取れるように思われる。 清濁状況の一端が見取れるように思われる。 は控えることにして、譜本に反映した「清ム」注記よりその当時のとの比較などを通して一語一語を吟味していく必要があるので速断との比較などを通して一語一語を吟味していく必要があるので速断とのとについては今後濁点・フリカナ、諸譜本との関係、他資料とれらから譜本に存する「清ム」注記が平曲伝承当時の漢語の清

い。なおよく検討すべきだろう。|一般的なよみ方でなかった証拠≫というようなことにもなりかねな|一般的なよみ方でなかった証拠≫というようなことにもなりかねな《その漢字に濁点・フリカナが付されるという事は、つまりそれが但し、本稿の如き 考え方を 濁点や フリカナ にも適用してくると

. 27

- いては他に金田一春彦氏「平曲の音声山下」(『日本音声学会々報』99・10)等が 奥村三雄氏『平曲譜本の研究』(昭56年桜楓社)第九章参照。尚、発音注記につ
- 3)抄物資料については、来田隆氏「抄物における「清」「濁」注記(『国語学』84)2、抄物大系刊『玉塵抄』(中田祝夫氏編・勉敲社)を用いる。頁数はそれに依る。
- 4 柳田征司氏『詩学大成抄の国語学的研究影印篇上・下』(清文堂)を用いる。以 下示す頁数はそれに依る。
- 「春秋」について
- よると鼻音の後位の連躙が鉄則でなかったことが知られる。 北院御室守覚親王の『右記』(『群書類従』二十四輯)や『徒然草』の百六十段に 頁には「春 秋」、高山寺蔵古往來院政末鎌倉初期點「春秋。」(注13引用論文より)。全て無表記、日葡辞書「Xunxǔ, Xunju」、更展落葉写表し、数一詩学大成抄録・切く審し、は観鏡外転十八合平声協音次清三等。平曲「春六秋(尾崎本畑a)」その他は「春」は観鏡外転十八合平声協音次清三等。平曲「春六秋(尾崎本畑a)」その他は
- 大学堂書店影印本を使用し、頁数はそれに依る。例えば(80a)は80頁右上を示
- 臨川書店影印本を使用する。尚頁数はそれに依る。
- 拙稿「九州大学蔵『平語』について」(『文献探究』11号)参照。
- 約41頁、Iでは15頁に一つ「清ム」注記が出現している。との尾崎本に認められるいて、IIはIの約18の範囲なのにほぼ同数の注記例が存している。即ち、Iではの人は「清ム」注記の出現率をみてみると、I(24~185頁)II(18頁以降)におり、I(24~185頁)II(18頁以降)におり、II(24~185頁)II(18頁以降)におり、II(24~185頁)II(18頁以降)におり、II(24~185頁)II(18頁以降)におり、II(24~185頁)II(18頁以降)におり、II(24~185頁)I 発音注記の偏向は今後いろいろな面から検討を加える必要があると思われる。
- 分けることについてはかなり考慮を要するが、便宜上、奧村三雄氏が「発音注記例 一覧の説明」(『平曲譜本の研究』師~町頁)でなさっているのに依った。 『韻鏡』の清濁区別を示した。また「清ム」注記が付された位置を語頭・語中尾に 漢字音の場合、連濁関係という様な事の他、もともとの清濁関係も問題になる故、
- 小松英雄氏「不濁点」(『国語学』80集)参照。
- 「宇音の連濁について」(『国語国文』第13巻)
- 14 13 12 「院政鎌倉時代における字音の連濁について」(『広島大学文学部紀要』第29巻) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(昭57年、武蔵野書院)本論参照。

- 音となるものに就て―」 (『国語国文』第37・38巻) 岡本勲氏「日本漢字音に於ける頭子音の清濁出内―韻鏡清の字にして日本字音濁
- 注14付論第三章「変体漢文訓読に於る字音語の性格」等参照。

16